

名古屋市域に被害をもたらした地震災害年表

和暦(新暦)	震央地名	マグニチュードM	被害程度
奈良時代			
和銅8年5月26日 715年7月5日	三河	6.7	三河南東部で正倉47破壊し、民家陥没。
天平17年4月27日 745年6月5日	美濃	7.9	美濃にて寺院、民家倒壊多数、余震多数、名古屋市域は震度6～7と推定される。
天平宝字6年5月9日 762年6月9日	美濃 飛騨	7.4	被害不詳、名古屋市域は震度5～6と推定される。
平安時代			
仁和3年7月30日 887年8月26日	北海道	8.6	京都、五畿七道地震強く家屋倒壊、死者多数、余震多数、津波は四国、紀伊半島、大阪湾一帯を襲い被害大、名古屋市域は震度5と推定される。
嘉保3年11月24日 1096年12月17日	遠州灘	8.4	畿内、東海南海諸国地震強く、寺院被害多数、津波は東海道沿岸被害、伊勢、津市、駿河被害、社寺、民家の流失400余、余震多く、嘉保を永長と改元、名古屋市域は震度6～7と推定される。
保安5年2月 1124年3月	尾張	5～6	海東郡碁目寺が破壊される、局地地震で名古屋市域は震度4～5と推定される。
元暦2年7月9日 1185年8月13日	琵琶湖畔	7.4	京都地震大、社寺院、民家倒壊多数、死者多数、余震多し、名古屋市域は震度5と推定される。
室町時代			
明応7年8月25日 1498年9月20日	遠州灘	8.6 (明応地震)	東海道全般に大地震、熊野本宮、那智の坊舎倒壊、遠江で山崩れ、地裂にて震害多し、伊勢大湊で津波により家屋流失1,000、溺死5,000(伊勢志摩で溺死1万人)、津波被害多く、浜名湖岸切れ海に通じた(今切という)。名古屋市域は震度5～6と推定される。
安土桃山時代			
天正13年11月29日 1586年1月18日	木曾川下流域	7.9 (天正地震)	山城・大和・和泉・河内・摂津・三河・伊勢・尾張・美濃・飛騨・近江・越前・加賀等にわたる地震で、天正13年11月29日の地震は飛騨白川谷の白山の活動によるものと考えられ、白川谷の保木脇で大山崩れがあり多数の圧死者を出した。11月30日午前2時頃から午後2時頃の二つの地震は木曾川下流域に発生したもので始めのが大きく、東海道、伊勢湾沿岸などに津波の被害がひどかったようである。尾張長島被害大、一宮でも社寺倒壊、岡崎城破損、大垣でも壊家多く、出火して城中残らず消失している。京都でも寺院破損し33間堂の仏像600体倒れている。名古屋市域の震度は6～7と推定される。
江戸時代			
寛文2年5月1日 1662年6月16日	琵琶湖西岸	7.6	山城・大和・河内・和泉・摂津・丹波・丹後・伊賀・若狭・近江・美濃・伊勢・駿河・三河等家屋、人畜被害多く、亀山、犬山、桑名等諸城破損、名古屋市域は震度5と推定される。
寛文9年6月2日 1669年6月29日	尾張	5.9	名古屋城三の丸石垣崩れる。名古屋市域は震度5と推定される。
宝永4年10月4日 1707年10月28日 15時頃	東海道 北海道	8.4 (宝永地震)	この地震は遠州灘及び紀伊半島沖の二元地震ともいわれるが、わが国最大のもので、震害の最もひどかったのは東海道、伊勢湾、紀伊半島で、袋井では全滅、浜松、見付・舞阪・鳴海・熱田で半ばつぶれ、尾張では壊家のほかに地裂より泥水噴出の震害あり、名古屋城では土堀やぐらはほとんど損傷、津島村では家屋全半壊170軒、知多郡では、大野、常滑等で家屋や人の被害あり、三河各地の城や宿場で被害のなかったところはない。豊橋では社寺29か所、土蔵249棟破壊、町家1,011軒、城のやぐら5、門3、死者11人、半壊程度の被害多数。高須・土倉新田の堤防破損。津波は土佐の被害最大、流失家屋11,170、溺死者1,844、尾鷲で溺死者1,000余、最大波高久礼で26m、地震津波の全被害29,000余、死者4,900人、11月23日富士山爆発、宝永山ができた。名古屋市域の震度は5～6と推定される。
正徳4年12月27日 1715年2月1日	揖斐 美濃	6.2	大垣にて城の石垣所々崩れる、京都地震強し、名古屋市域の震度は4～5と推定される。
享和2年10月22日 1802年11月17日	尾張	5～6	名古屋城本町門の石垣崩壊、本町門西の松が倒れ、高壁が崩れ、堀に落ち込んだ。海東郡辺では地割噴砂の所あり、名古屋市域は震度5。
文政2年6月12日 1819年8月2日 14時	琵琶湖東岸	7.4	被害の著しい区域は琵琶湖東岸から木曾川下流にかけての広い区域。名古屋城の石垣所々破損、城下では所々土堀、築地が崩壊、地震の門倒れたものあり、東西方向の町並で多かった。広井一横三ツ蔵堀切町では土堀崩れ、若宮の築地崩れた。西掛所の門転倒、法花寺町常徳寺の門崩れる。八事興正寺の塔損傷、石灯ろう、墓石の転倒回転したもの多し。葉栗郡にも被害、名古屋市域の震度は5～6と推定される。

和暦(新暦)	震央地名	マグニチュードM	被害程度
天保4年4月9日 1833年5月27日	美濃	6.4	大垣付近山崩れ、民家倒壊、泉湧き人畜の死傷多し、名古屋市域の震度は4～5と推定される。
嘉永7年6月15日 1854年7月9日	伊賀盆地	6.9	伊賀上野にて死者約623(593)、潰家2,259、伊勢・四日市で潰家1,133、死者157、震災地全域で潰焼家屋5,000、死者1,352、尾張津島では町中は破損し道路上、船中ともに負傷者が多かった。名古屋市域の震度は4～5と推定される。
嘉永7年11月4日 1854年12月23日	東海道沖 遠州灘	8.4 (安政東海地震)	家屋の倒壊範囲は伊豆から伊勢に至る沿岸と甲斐、信濃、近江、越前、加賀に及び特に伊豆から天竜川口に至る所がひどかった。津波は房総から土佐の沿岸で被害大きく、伊勢湾三河湾沿岸、渥美半島の太平洋沿岸でも被害、全体の被害は倒壊流失家屋8,300、焼失600、圧死者300余人、流失者300余人、名古屋市域の震度は5～6と推定される。
嘉永7年11月5日 1854年12月24日	南海道沖	8.4 (安政南海地震)	被害全体で全壊約10,000、半壊約40,000、焼失約6,000、流失約15,000、死者約3,000人で被害は近畿、中国、四国の全部と九州、中部の一部を含む。津波は房総から九州の沿岸を襲い被害大。前日の地震を含め三河地方家屋多数倒壊、三河湾、遠州灘沿岸は津波で被害、豊橋の吉田城本丸の多門、やぐら、石垣等大破。尾張地方では知多地方や沿岸地方の被害大、名古屋城三の丸の門、多門やぐら、高塀など破損、武家屋敷147か所破損。熱田では海岸に高潮、神戸町へ海水侵入、家屋倒壊8、破損19、高塀・橋台・石垣等崩壊、名古屋市域の震度は5と推定される。
明治時代			
明治22年 1889年5月12日	岐阜	6.7	岐阜付近で家屋の壁の亀裂、堤防の破損あり、名古屋市域の震度は4～5と推定される。
明治24年 1891年10月28日	濃尾	8.4 (濃尾地震)	震域は仙台以北を除き日本中にわたり強い震動を感じ、震災地を通じて、死者7,469人、負傷者19,694人、住家全壊85,848戸、その他の建物を合わせ142,177軒、平均住家全壊11戸につき1人の死者の割合。出火あり。この地震で岐阜県水鳥村根尾谷を通る大断層が本州を横断した。水鳥村では西方が6m隆起し、南南東に2mずれた。金原では8mの横ずれを生じた。名古屋市域の震度は6～7となる。
明治25年 1892年1月3日	愛知県西部	6.5	愛知県東春日井郡下で家屋の小破あり、濃尾地震の余震。名古屋市域の震度は4～5と推定される。
明治27年 1894年1月10日 18時4分(M6.8) 18時45分(M7.4)	愛知県北部	6.8 7.4	濃尾地震の最大の余震、木曾川の沿岸地方で小被害。安八郡那加村、葉栗郡田代村、太田嶋村、宮田村、丹羽山巴村等で家屋の小破損、石垣の崩壊、山崩れ、道路、堤防、橋梁の破損等少数。名古屋市域の震度は5～6と推定される。
明治31年 1898年11月13日	愛知県北部	6.5	濃尾地震の余震。名古屋の震度は4～5と推定される。
明治32年 1899年3月7日	紀伊半島中部	7.6	奈良県吉野郡、三重県南牟婁郡に被害大、尾張南西部で強く、知多郡半田町、海東郡蟹江町では醸造中の酢、酒が動揺であふれ出た。知多郡大野町や横須賀町では家屋破損小被害。常滑町では陶器窯の破壊あり。名古屋市域の震度は4～5と推定される。
明治42年 1909年8月14日	滋賀県 姉川流域	6.9	被害は滋賀、岐阜両県にわたったが、局部的な破壊地震、全体で死者41、負傷者774、住家全壊976、半壊破損5,145、非住家全壊破損5,760、姉川下流で泥水数十か所から噴出、名古屋市では門前町などにて墓碑倒れ、商品の転落破損、愛知県の中島郡、東春日井郡、知多郡などでも小被害。名古屋市域の震度は4～5と推定される。
昭和時代			
昭和19年 1944年12月7日 13時35分頃	熊野灘 (東南海地震)	8.0	被害は静岡・愛知・三重・岐阜・奈良・滋賀の各県に多く、特に名古屋重工業地区の被害が大きかった。被害の詳細は戦時中で不明なるも、判明しているものは合計死者872人(998人)負傷者1,859人、住家全壊26,130戸(13,586戸)、同半壊46,950戸(11,854戸)、非住家全壊16,686棟、同半壊11,854棟。東海道線では橋や線路に被害あり、12両の列車が転覆した。津波による被害は多く、流失家屋3,059戸、水死者約250人、流失船多数、地変も大規模に発生。津波の高さ熊野灘沿岸8～10m、鳥羽及び紀伊半島、勝浦付近で20～30cm沈下。余震多数発生。名古屋市域の震度は5～6。
昭和20年 1945年1月13日 3時38分頃	愛知県南部 (三河地震)	7.1	三河地方被害大、死者1,961(1,180)人、重傷者896(521)名、住家全壊5,539(3,046)戸、半壊11,706(2,278)、非住家全壊6,603(1,489)、半壊9,976(1,218)、深溝断層を生じ長さ28km、南西側が最大2m押し上げられ、付近の海岸は0.7～1.5m隆起した。津波が蒲郡で1m、多数余震発生。名古屋市域の震度は4～5。
昭和21年 1946年12月21日 4時19分頃	南海道沖 (南海道地震)	8.1	被害は四国、九州、近畿、中国及び中部地方の一部に亘り、死者1,330(1,362)、(不明102)(傷3,632)、家屋全壊11,591(11,506)、半壊23,487(21,972)、流失1,451(2,109)、(浸水33,093)、焼失2,598(2,602)、(船舶破損流失2,991)、津波は九州から静岡県に至る海岸に来襲被害あった。最高波高、紀伊半島南端の袋で6.6m、地変は各地にみられた。余震はきわめて広範囲に発生。名古屋市域の震度は4～5。

※「新修 名古屋市史 資料編 自然」及び「名古屋市における既往の地震とその災害」より、名古屋市域で主に震度5以上とされるものを抽出